



ReLive Journal



“りらいぶ” ジャーナル No.41

2021年 秋涼号 (10月20日発行)

＜“りらいぶ” 憲章＞

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、
その生き方をサポートします

＜目次＞

1. 第15期 期首ご挨拶
(理事長 竹川 忠徳)
(副理事長 (関西支部長) 阿賀 敏雄)
2. コロナ下での軽井沢旅行 (楽しい人生を求めて)
(R&I顧問 渡島 八洲夫)
3. 脚の運びは乗り手による
(会員 鳥居 雄司)
4. カッター (短艇) レース
(会員 赤神 潔)





1. 第15期 期首ご挨拶

NPO法人リタイアメント情報センター
理事長 竹川 忠徳



皆様におかれましては、コロナ禍のもと如何お過ごしでしょうか。政府からの自粛要請もあり、私どもの活動計画もその多くが延期または中止となり忸怩たるものがあります。

今秋から特定非営利活動法人(NPO) 法人リタイアメント情報センターは 15 期を迎えますが、ここで心機一転 ウィズ・コロナからアフターコロナへの新機軸を打ち出したいのです。

その走りと致しまして、事務局ではデジタル技術活用の研究を進め、前期半ばから ZOOM を利用した情報交換会などを関東地区で試行しております。

先日の NHK・Humanience という番組に、京大 IPS 細胞研究所所長の山中伸弥先生が登場され、IPS 技術を用いてカリフォルニア大学のアリソン・ムオトリ先生が、ネアンデルタール人(古代人)とホモサピエンス(現代人)の脳神経細胞比較研究に成功したとの興味深い話をされました。

ネアンデルタール人は大柄で頭蓋骨も大きいにもかかわらず絶滅しました。逆にホモサピエンスの存続理由は、優れたコミュニケーション能力により情報が早く伝わり、環境対応力が保てたということです。

山中先生は「このような話や多くの難病治療薬開発の成功にはロマンを感じます。私は、IPS 情報の囮い込みをやめて広く使ってもらうように考えていました。これがホモサピエンスとして良かったと思います」とにこやかに話されました。

その瞬間「人を助けて我が身喜ぶ」という同志が集う居心地の良いコミュニティ。

皆様、お一人おひとりの笑顔が私の脳裏をかすめました。

今期も何卒宜しくお願ひ申し上げます。

NPO法人リタイアメント情報センター
関西支部長 阿賀 敏雄



恒例の行事が延期、中止。ストレスのみが溜まるばかりです。

暫くは、好きな絵を鑑賞し、コロナの終息を祈る毎日です。

〈キヨウヨウ・キヨウイク・エイヨウ・

シヨウシヨウで健康ライフ〉



2. コロナ下での軽井沢旅行 (楽しい人生を求めて)

元キャメロン会 会長
R&I 顧問・会員 渡嶋ハ洲夫

毎年夏は暑い東京をはなれて、2000年来涼しいキャメロン・ハイランド（マレーシア）で2ヶ月程度のロングステイを楽しんできた。

海拔1500mのため温度は20°C前後と涼ぎやすく快適である。

昨年と今年はコロナ禍のため出国できずキャメロンには行く事がなかった。

緊急事態宣言下であったが、多少の罪悪感を振り切って9日間（2021年8月23日～31日）と短期間であったが軽井沢に滞在した。往復とも新幹線を利用したが予想通りガラガラであった。

1. 「佐藤のぬくもり」ペンションに宿泊



佐藤のぬくもりペンション

軽井沢駅に近く便利である、軽井沢独特の木立て囲まれ環境は良い。

目印になる建物もなく木立が続き散歩に出て数回迷った。

建物の外観はいかにも若向き。

難点はバリアフリーでない事。

朝食は粗末で食欲もわかない。

レストランの予約をしてくれ往復送迎付き、どこに行くにも車で送ってくれたが無料だったのは有り難かった。

（最終日まとめてチップを渡した）。

宿泊レートはツインで2万円/1泊と手ごろ。

2. レストラン

軽井沢にはおひただし数の和食、中華、洋食のお洒落な名店が連なっている。

今回立ち寄った店の内数点を紹介する、居酒屋で食すことも3回あったが目新しくないので省略する。

コロナ禍のため営業時間も17時～19/20時と短時間、休業の店もあり予約するのも苦労した、但しアルコールはどこでも注文可であったのは幸いであった。

A. グラダナ軽井沢（スペイン料理） (0267-42-7420)

スペイン料理といえばパリアは手間がかかるので予約の時に注文をきかれた。
塩分控えめな自然熟成生ハムはじめこだわり料理が多い、数点食したが美味しかった。
ワインも充実している。
(夕食5000円)

B. ゆうすけ川魚料理 軽井沢 (0267-45-5378)

JR 中軽井沢駅から徒歩20分の日本ロマンチック街道に位置する。
鮎、岩魚、鯉、信濃ヒメマス、泥鰌等料理（夏なので柳川鍋は休止）のレストランである。
メニューは岩魚の塩焼き、岩魚のお作り、はやのから揚げ、各種蕎麦、饅頭。岩魚骨酒。生け簀から救って供してくれた。
(ランチ3000円 夕食5000円)



川魚料理店（ゆうすけ）

鮮魚水槽（ゆうすけ）





**C、うなぎ宮川 軽井沢 別邸
(0267-41-6334)**



東京に100年を超える老舗の軽井沢支店。JR 軽井沢駅から歩いて2分、共同の建物の2階、カウンター席と座敷がある。流石鰻はじめどれも美味しい。メニューは鰻重、鰻ざく、鰻巻き等。(夕食 3000円~5000円)

D、ピストロ

軽井沢駅から直ぐ、各種カレー、かつ丼、ピザ等庶民的なメニューが並ぶ。ランチには良い。味はまあまあだ。(3000円以内)

3. 温泉

近場の温泉に行った（トンボの湯には2回）

A、トンボの湯軽井沢 (0267-44-3580)



JR 軽井沢駅から車で15分、星野リゾートの一角にあり村民食堂は温泉の広場で隣接して

いる。一帯はハルニレ（春榆）に包まれ自然を満喫できる。

入場料 1350円、開場 10時~23時、レンタルタオル（300円）も借りられる。

1915年開湯以来多くの人が訪れた。北原白秋、与謝野晶子も訪れた。



全て木造で温泉内は広く、清掃が行き届いており清潔だ。湯温も低めで長時間ゆったりとした時間が過ごせる。出湯量は毎分400リッター、全てかけ湯として使われ、再加熱はない。露天風呂、サウナ、水浴槽は別棟にあり気持ちが良い。腰痛症、冷え症、疲労回復等の効能があるとのこと。

その名の通り温泉前の広場にはトンボが集まり自由に飛行をしているのを見るのも癒される。

昼食は隣接の村民食堂でとった。ほぼ丸ごと

B、八風温泉軽井沢 (0267-32-6810)





JR 軽井沢駅から車で15分、ルグラン軽井沢ホテルリゾートの一角にある。

ホテルは少し上のところにある。リゾートは7万坪の広大な敷地にホテル、ヴィラ、温泉棟、庭園が点在する。



温泉は2018年に開湯、全てかけ湯として消費して再加熱はない。

内湯、露天風呂、坪湯、水風呂、サウナが整っている。

入湯料1300円、開場10時～22時、レンタルタオル330円。適応症は間接リウマチ、腰痛症、神経痛等のこと。

4. パティスリー・サダハル・アオキ、パリ アトリエ軽井沢

出かける前の日の日経新聞に、パリで数々の賞に輝き、パリや日本にも多くの店を持つパティシエ青木定治氏が軽井沢の店をリニューアルオープンしたとの記事を読み、早速訪ねた。



JR 軽井沢駅から車で15分程度の国道18号に位置する。瀟洒なアトリエ、店舗、カフェ、よりなる。

商品は80種のジャム、その他マカロン、ケーキ、焼き菓子が並び選択するのに迷った。

ジャム1100円以上と高い、マカロン生地にアイスクリームとイチゴを挟んだ贅沢なマカロンは1000円と美味で店の格式から価格は高価であるのは仕方がない。

5. 雑感

- * 思っていたより人出が多い。
- * レストランは営業時間も短縮、人員制限のため予約はとりにくかった。
- * ホテル、レストランのコロナ対策は十分されていた。
- * コロナ渦どこ吹く風と開放感に浸った。

以上



3. 脚の運びは乗り手による

会員 鳥居 雄司

馬が変わって

大会前日の天気は、雨具を着てもぬれるひどい雨降りで、気持ちがなえますが、馬は全く気にせずに獣医検査が行われました。この大会ではいつも騎乗している馬ではなく、トウインクルという芦毛（灰色）の馬をあててもらいました。比較的大柄なすっきりとした様子の体型をしています。獣医検査で、心拍数が1分間52拍（64拍未満を求められます）、その他の項目も競技に向けて良好な結果でした。今回の馬も十分に訓練が行き届いて、元気よく走ろうとする馬の様子（前進気勢）が伝わってきます。これも獣医検査の項目の一つに入っています。ただ一箇所気になるのは歩様（馬の脚の運び）がBという評価でした。

競技会では、地図で示された走路と事前にたてた走行計画を考えながらゴールに向かいます。今回の距離80kmは6時に出発して最初の一区間を2時間30分、二区間を2時間30分、三区間を2時間という計画にしました。距離80kmは30km、30km、そして20kmで構成され、各区間の走行後に獣医検査を受けます。今回はいつも乗っている馬と違いますが、十分に訓練をされている様子なので、これまでと同じように騎乗しようと考えました。この馬は手綱を強く引かれるのは好まないようなので、たるまない程度の張りにしようと考えました。

一区間を順調に

一区間は、同じ牧場から馬をお借りした方と一緒に2頭でコースを走りました。1頭で参加してそのままゴールまで単独で走破する人もいますが、私の場合は、同じ牧場の馬で参加した人と一緒に完走を目指すことが多いです。私をエンデュランス競技に誘った方は「エンデュランスは外乗（牧場の外を走り回る乗馬）の延長」と話され、そのつもりで競技に参加して、非常に楽しい印象をもちました。外乗ではガイドの後についていくので、騎乗した馬をとりたてて制御をせずに馬に

任せます。そのために、馬はガイドの後をついていく訓練がされています。多くの外乗で、「前の馬に近づいてもいいけれど、横並びになったり、抜かしたりすることは止めてほしい」と注意されます。これは横並びになったり抜かされると、馬は急に速度を増したり、抜き返そうとしたりして、ガイドについて行く訓練が無駄になり、それぞの騎乗者に馬の制御を求める可能性が生まれるためです。また、外乗で通る道はそれほど幅が広くないところが多く、ほとんどは1列縦隊で進みます。馬は集団で動き、先頭の馬について移動する傾向があるようで、ガイドが騎乗する先頭馬の役割が重要です。



一区間を走り終えるとゴールまで2時間12分の走行でした。予定は2時間30分だったので予定よりも若干早いペースで順調に一区間を走り終えることができました。一区間後の獣医検査は前日の獣医検査の結果と全く変わりなく、馬の疲労は感じられませんでした。ただ一つ気になったのは馬の歩様がB評価だったことです。検査項目の「歩様」は、速歩で20mほど走って行く馬の後姿と戻ってくる姿を見て足の運びを確かめるという検査です。例えば砂利道などで馬の蹄鉄に小石などが詰まると馬が違和感を覚えて、その足



の踏み出しが変わります。また、足を動かす筋肉が均等に使われないとバランスの取れた足の運びができなくなります。馬の疲労も足の運びに現れるので、歩様検査で馬の状態を確認し、次の区間に臨めるかどうかの判断材料になります。これまでの経験で、私の騎乗は進行方向に向かって左に傾くことがあり、馬の重心の左側に60kg（私の体重）の余分な重りがついている状態で運動しなければならず、偏った重心を補いながら長時間の運動を強いられます。過去の歩様検査で歩様異常を指摘されたことがあります。それから、自分の騎乗姿勢を以前より強く意識するようになりました。この後に30kmの二区間と20kmの三区間が残っているので、騎乗姿勢をさらに注意して乗ろうと考えました。

落ち着いているのは

2区間の出発は落ち着いた感じで始まりました。馬が落ち着いているのは悪いことではないのですが、馬が競技会ではなく外乗で人を乗せていると感じると、のんびりした動きのままになり、求めている前進気勢を得られない可能性があります。



馬の前進気勢が乏しくなると全く動かさずに止まることがあります。その時は最後の手段として、馬から降りて引き綱をつけて引いて動かします。

動きが出るまでしばらく引き続けることもあります。とても疲れますが、競技の一部と考えています。それで、競技会の時は引き綱を最後の手段として身に付けて騎乗しています。

二区間は⑯番から⑯番の登り坂が最も大きな難所と予想して出発しました。ここを幸いに何とか登りきることはできましたが、その後の動きが緩慢になり、求めている状態ではなくなりました。前進気勢を高めようと苦労しながら進んでいる時に、たまたま距離60km部門を走っている集団が私たちを追い抜く場面がありました。馬は先頭馬についていく傾向があるので、私たちを抜いた60kmの集団の後につけて2区間を走り終えました。二区間は2時間30分の走行を予定していましたが、2時間54分かかりました。予定時間の超過は難所を登り終えてからのもたつきが原因でしょう。

さて二区間終了後の獣医検査ですが、歩様を除いて全て高評価だったので順調に三区間に進めることになりました。しかし、歩様のB評価は変わることなく最後の区間に残された不安材料でした。それで、歩様の悪化が原因で完走不可能にならないよう騎乗しました。

3頭で交代して

三区間は20kmで短いのですが、先頭に立って同行している馬を活発に先導することができなかったり、他の馬に先導を代わっても途中で先頭馬が止まってしまったり、十分な速度を保てないまま先頭を交代しながら3頭で進みました。初めの予定では2時間で到着の予定でしたが3頭で交代しながら頑張った結果、1時間43分で走り終えることができました。最後の獣医検査の結果次第で完走が決まります。検査の結果、歩様の悪化はなく、無事に完走することができました。

エンデュランス競技は、タイムレースなので短時間で走破することは重要ですが、馬の状態を良好に保ったうえで、という条件つきです。この条件がついているのが競技の魅力だと感じています。そして、馬の良好な状態を保ち、無理な運動をさせないために、乗馬で一般的に使われる拍車と鞭は持参できません。



4. カッター（短艇）レース

会員 赤神 潔

経験を生かして、老齢とコロナ・パンデミックに勝ちたい。

私は日頃、痴呆症の始まった妻・富美子の相手を出来るだけやり、ベッド・マットレスならびに寝具の乾燥・整頓、ユニットの掃除、洗濯、買い物、食事の用意に富美子の参加を出来るだけ促しながら、自分の首や上半身の前のめりや、狭くなり始めた歩幅を修正しながら、体力の維持、増強に務めている。

コロナ・パンデミックのため、人混みの中の散歩をやめ、コンドの中で毎日 200 階の階段を 2 回に分けて登り、大量の汗をかき、血液循環、新陳代謝を刺激しているつもりだが、下腹がしまり、学生時代の体重に戻って、血圧が低くなったぐらいで、1 年経ってもそれ程筋肉がついたわけでも、若返ったわけでもない。

1 年間 240 階/1 日平均を続けたが、体重の減少が止まらないので、今はバックパックをやめ、200 階/1 日にしている。特に、ハゲ頭、白髪、皮膚のシワやエイジスポットにはあまり変化が見られない。

階段には手すりがあって、両手を 1 日に 2、3 千回使うが、若いときの様には掌に豆も出来ない。1 日に少なくとも 2 回は富美子をうまく誘って、20 階ずつ登ることにしている。

「カルシュームは細胞間の正常なコミュニケーションにはなくてはならない」と昔何かで読んだので多く取り、私の骨密度は 28 歳で少々滑っても、つまずいて転んでも、平気だが、爪がよく伸びるぐらいで、健康を保っている様だが、老化を修正するほどの効果は見られない。

近頃、近所の人や孫に「君はやり過ぎて、すり減ってしまうぞ。」「もっと、蛋白を食べろ！」と 2 回も言われた。

階段登りで、息が苦しい時は、若い土官候補生

の頃の防大のボート部の練習やカッターレースの練習を思い出す。

50 年以上前の若き 13 人のクルーが不可能を可能にした手応えのある勝利。手応えのあった青春の快挙であった。

（「北米への道」実名原稿より抜粋）



防衛大学校は東京湾の入り口に近い西南部に、僅かに南へ突き出した三浦半島の先端にある観音崎から、晴れた日に富士山と東京湾一帯、対岸の房総半島を遙かに望出来る、標高 80 メートルの小原台にあった。

小原台は背丈程にも生い茂った、亜熱帯性の暖竹の藪の中に、厚いコンクリートの砲塔跡が散らばる、浦賀水道を守る歴史的な要塞跡である。当時、一人でキャンパス周辺を探索、徘徊していると、自然と、古強者どもの強力な靈氣力無言で語りかけて来て、若き迷える防大生を励ましてくれる絶好の環境にあった。

私は電気工学の授業をとっていたが、普段は教室で行われる、工科系の課業が 4 時頃に終わると、大抵の学生は、それぞれの運動クラブの練習に行くことになっていた。

中隊対抗カッター（短艇）レースの前 1 か月間は、それの中隊のカッター要員は、走水のポンド（学生の訓練用の港）に駆け下り、競争で各々のカッターをダヴィットからポンドへ下ろし、がむしゃらに東京湾へと漕ぎ進んだ。



オールはとても重く、太くて、長くて、折れないように、硬いチーク材で出来ており、その当時、1本1万円したそうだ。我々陸上53中隊が漕ぐことになったカッターには、オールの先の水かきの幅の部分が半分擦り減って細くなったものや、水かきが半分折れて短くなったもの、乾燥してオール全体が弓のように極端に曲がったものがあり、私は練習を始めた頃、何故こんなに悪いオールが我々のカッターに集まっているのか不思議に思い、係の、顔見知りの海上の助教に「新品と替えてくれないか」と掛け合ったことがあった。その時、助教は、「自衛隊は貧乏で、予算が限られているので、原則として、どんなに悪くても替えられないが、漕いでいる時に、オールが折れれば新品が支給される」と、肩をすばめて、私の目を見上げてウインクした。あたかも私に、「お前なら折れるだろう、頑張って折って来い」と目で言っている様だった。オールは1艇に付き13本あり、1本は予備で12本使う。

私はその日から、毎日、練習の後、東京湾からポンドに帰って来て、係の助教の視線を陸の上に確認し、11人の友に「かい止め」(オールを水に入れ、漕がずに艇を静止する事)を命じた。そして悪いオールを選び、1人で意地になって必死に漕いた。初めは漕いでいるうちに、折れるものかどうか分からなかったが、2本の足のつま先を厚い板で出来ている前の座席の後端に当て、お尻を浮かせて、全身の力と体重でオールを漕いた。するとオールが水を掴んで湾曲した。次は水を掴んで曲がり始めたオールに、渾身の力を込めて全体の反動を付けてしゃくってみた。騒ぎに気付いた陸の上の他所の中隊の学生達60人ばかりと教官達が固唾を呑んで私を見守った。2、3回漕いでいるうちに、オールがきしんで、自分の体は疲れてもうこれが限界だと思ったが、折れない。しかし、ここで止めると、見ている全学生に笑われる。

回りには、他所の中隊のカッターが練習を終えて、どんどん東京湾から帰って来る。ポンドが込み合う前に、陸にあがらねばならぬ。どうしようもないギリギリになって、私が『死に物狂いに吠えた』。腰骨中央に異常な圧力が加わり、かすかにピリピリと痛みを感じた。突っ張っている足指と足指の又に板が異常なまでも食い込んだ。瞬

間、フワッと力が抜けて体が中に浮いた。ついに折れた。つま先とオールの間で、弓のように反り返った私の体は、後ろで“かい止め”をして、必死にオールにしがみついている2人の友の上に頭から乱暴に落ち、友は遮二無に私の頭を、足と体で受け止めた。

私のクルーは、オールを全力で折るためのピリピリとした異様なまでの気魄と、全力を本気でオールに打ち込む瞬間の技を、目前で毎日観察出来たようだ。私は1人で、毎日これを繰り返し、9本位だったと思うが、悪いオールはことごとく新品に替えて貰った。例の助教が、しまいには、「頬むから、オールを折るのはこれ位にしてくれ!」と、私の目を見て両手をスリ合わせ、真剣に懇願したのが忘れない。その時、スペア(予備)のオールは助教の許にもう1本しか残っていなかった。私以外に、オールを折ろうと決心して折れる学生は、当時いなかったようだ。

比較的体の小さい身体付きのSが艇長になり舵を取り、号令をかけた。中隊付教官は何も言わず、唯、申し訳程度に艇長の横できれいな制服を着て腕組みをして座っていた。号令に合わせて水を掴み、1斉に漕ぐ。勝敗の差は、通常、技術的にはほんの少しで、12人が艇長の号令に合わせて心身ともに1体となり、全員が同時に且つ効率よくタイムリーに力を集中出来ることに起因する。

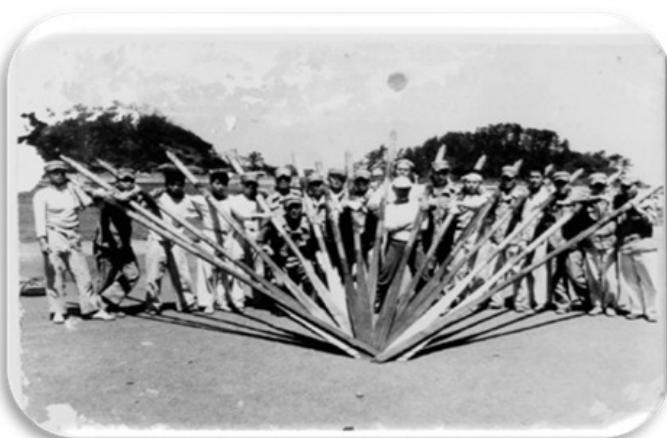
夕方の6時には、80メートルの標高の小原台目がけて、笹の生い茂る崖の踏み分け道を、全員で競争してイノシシの群れのように無言で駆け上がった。

入浴と麦飯の夕食(通常、大麦を押しつぶしたものと米半々の物と2、3のおかず)をとり、2時間の自習時間の後、点呼があった。点呼の後、消灯までの間に、我々短艇要員は全員廊下に出て1列に並び、15分間腹筋の運動をした。勉強机の椅子の薄いクッションを外し、廊下のコンクリート・フロアに敷いて、お尻を下ろし、両方のつま先を1列に並んだ靴箱の下に突っ込んで、上級生の笛の合図に合わせて、両手で自分の後頭部を掴んだまま、上半身を上げ下げした。笛の合図は無情に早くなったり、遅くなったり、何秒も途中で止まったりして、周りに立っている大勢の上



級生達が我々を大声でしごいた。

練習が始まって直ぐに、お尻の皮が何度も擦り剥けた。擦り剥けた所にパンツが血で張り付き、歩くとそれが乱暴に剥がれて血がまた出た。1か月の間に腹筋と側腰筋と、背筋が、丁度大きな洗濯板の如く見事に付いた。何度も掌と指に豆が出来ては潰れた。掌と指の皮がどんどん厚くなつた。幾ら厚くなつても無理をするとまた簡単に剥げた。指もどんどん太くなつた。



写真中央、腕組みした艇長 S の後ろの
鉢巻をした方が 赤神 氏

試合の前夜、廊下での腹筋練習の後、私は如何しても勝ちたい一心から、艇長 S に声をかけ「ちょっと、皆に話がしたいので」と、よその中隊と比べて余り体格の良くない皆を、薄暗い4階建ての学生舎の屋上へこっそりと呼び、突然、『明日は、皆で死のうじゃないか』と提案した。「全力を出し切って、ゴールに入った後、力尽きて全員で死のうじゃないか」と言う私の提案だった。

丁度、前のオリンピックのボートの競技で、確かに、東ドイツのチームだったと思うが、ゴールにに入ってから、死んだ選手が出たのを覚えていて、自分がボート部だったこともあって、以前、「そんな事があるのか?」と徹底的に考えさせられたことがあった。

「オリンピック選手も我々軍人も使命はただ1つ、勝つことにある。」
どの中隊も、1ヶ月間、我々と同じように練習した。技量は全く迫中している。後は、どれだけ我々が勝ちたく思っているかが勝負となる。もし全力

を出し切って、その結果死ぬのであれば、それ程美しいことはない。体が疲れて、息が続かなくて、筋肉が痛んで、もう自分の力はここまでだと感じた時、自分だけ力を緩めて生き残ろうと思うな。頑張り続けて、完全燃焼して、俺こそゴールに入ると同時に、真っ先に『死んでやる』と思え。オリンピックの運動選手が勝負を懸けて死んだのである。我々職業軍人の防大生が勝負の後、1人や2人絶対死ねないはずがない」と私は続けた。

私は中学校の3年生の時、大切な経験をしている。中百舌鳥で大阪府の中学対抗の運動競技会があり、私は砲丸投げに出た。当時、東京から途中転校して来た、実に、真面目で、責任感の固まりのような岡田君が、4中の代表として長距離走に出た。彼は皆の声援に答えて頑張って、こちらを怨めしそうに振り返りながら頑張って、2着か3着でゴールに入って倒れた。我々は彼を想いで自分達の場所へ戻ったが、彼の顔が段々紫色になり、口から白い泡を吹き、体が猛烈に震え始めた。当時は、救急医なんぞ聞いたこともなかった頃だ。先生はおろおろ走り回り、大騒ぎで皆が八方に向いて助を呼んだ。私は彼を毛布で包み、目を見つめて、涙を流して無事を祈った。岡田君の顔は1旦、うす黒くなつて、目の前で「死ぬ」と思った。しばらくして、徐々に色が薄らいで、静かに生きがえった。私はこれ程まで、我々(あるいは勝負)のために、頑張った奴を今まで目前に見たことがない。彼のことが、私の頭に浮かんでいたのだ。

私の、『明日は皆で頑張って、ゴールに入って全員死のう』と言う提案を、真面目に黙って、涙し、震えながら私の目を見つめて聞く奴の中で、にたにたして不真面目な奴が1人いた。

次の日、午後3時半頃、何時もの様に課業を終え、走水ボンドへ転がるように急いだ。うちの中隊は皆、やはり私の『皆で死のう!』という提案のためか、少し緊張しており、体の動きがぎこちなく顔面蒼白で口数が少なかった。

いよいよ、ハーバー・ランチ(エンジン付き)が我々の乗ったカッターを船(もやい)ロープで数珠つなぎに牽引して、東京湾の沖合に出た。

カッターと言うカッター、およそ20艇程だったと思うが、東京湾の灰色の薄もやの中に見え



隠れして、どの艇も「士気」を上げるため、大声で気勢をあげていた。

我々は、唯、俯き加減で、ひきつった目を大きく見開いて、無言で、お互いの目を通して、心の中の『死氣—死の意志—殺氣』を確認し合った。

ハーバー・ランチのスタートの霧笛に、舷口ープを1斉に離し、その場で90度向きを変え、1列に並んでポンドを目指した。

間髪を入れず、私が思わず、「死ぬぞー！」と大声で気合いを入れた。艇長Sの横に座っている指導教官が、その意味を解せず、びっくりしてバタバタと音を立てて、黒い皮靴でカッターの船板を踏み直して飛び上がった。

艇長Sが、そのドタバタに邪魔されて不意を突かれ、何時もの号令を1瞬忘れてしまい、苦し紛れの咄嗟に、「しっ、死ぬー！」と私に続けて握りこぶしを、我々の頭上に引きちぎれんばかりに突き上げた。その瞬間、暗黙の内に、「死ぬー！」、「死ーぬーぞー！」が我々の掛け声になった。艇長Sの「死ぬー！」でオールを突き出して、我々が「死ーぬーぞー！」と叫んで、万身の力を入れて、オールを引いて漕ぎ始めた。昨夜、屋上で、ひとりわ、にたにたしていた奴が皆に合わせて、「死ーぬーぞー！」と首に青筋をたて頭を振り乍ら、口から泡を飛ばして、叫んで漕いでいた。

両脇で、「1!-2!-3！」、「1!-2!-3！」とそれぞれの艇長の号令で静かに漕いでいる、他所の中隊の漕ぎ手と指導教官が、我々の奇妙な絶叫に気付き、理解出来なくて、1瞬、2瞬と、中には何度も振り向いて我々を見た。

私と私のクルーの多くの者の目玉はそれに気付き、同時に1瞬「決まった。——勝った。」と感じた。レースが始まって、ほんの数秒後だ。気迫の次元が明らかに違っていた。皆の顔付きが、その意気込みのため、緊張して、青白く引き吊っていた。「死ぬー！」、「死ーぬーぞー！」、「死ぬー！」、「死ーぬーぞー！」と絶叫すると、『本気の力』が入った。

この時、心なしか、皆の呼吸と肩と腰の入れ様、足の踏ん張り様が、足指の1本1本の突っ張り様が崩って、ちょうど、私がオールを折る時と同じ様に決まっていたと思った。皆の太いチーク材

のオールが水を掴むと同時に、見事に揃ってたわんでいた。声を出して、呼吸を合わせて「死ーぬーぞー！」と皆で絶叫することがこんなに効くとは不思議だった。

1瞬の内に、軽々と我々が1艇身程前に出て、それに気が付いた13の友はますますがむしゃらになっていた。突っ張っている2本の足が折れるか、2本の2の腕がちぎれるか、掌の豆も、尻の赤剥けも、とっくに感じなくなっている、いきり立って、オールを漕ぐ私の手の指の間に鮮血が面白い程止めどもなく流れ出した。鮮血は無情にヌルヌルで、手には1層力が入った。

皆が狂って、人間であることを1時止めて、全く制御の効かない、暴走するカッターの機械の1部になった。指の間の血を見ると、苦惱に反して、何故か奇妙に嬉しくなった。

瞬く間に、差は5艇身程になった。これだけやると普通なら力を使いきって、ふらふらの筈なのだが、『トップに飛び出していると自覚する』と同時に、背筋の当りに、電気ショックのような奇妙な戦慄を感じた。その戦慄と共に、どこからか不思議な新たな力が、湧いて出て来るのか、疲れがどこかへふつ飛んで、分からなくなるのか、分からないが、「死ぬー！」、「死ーぬーぞー！」と、無謀にどんどんやってしまった。



普通、カッターは元々大きな船に積んであり、船が遭難時に海に下ろして、50人を救助出来るように、安定度と安全度を第1に作った木製の救助艇だ。丈夫に出来ているため、非常に重く、不格好な程ズングリと幅広に出来ているため、漕ぎ手がいい加減に、各々、バタバタ、バタバタ漕いでいると、大きな抵抗に負けて慣性が付かない。特に、波のある海洋では、波が来る度に、せっかく付いた小さな前進慣性も、波の上下運動のためにたちまち消えてしまう。しかし、この時は13



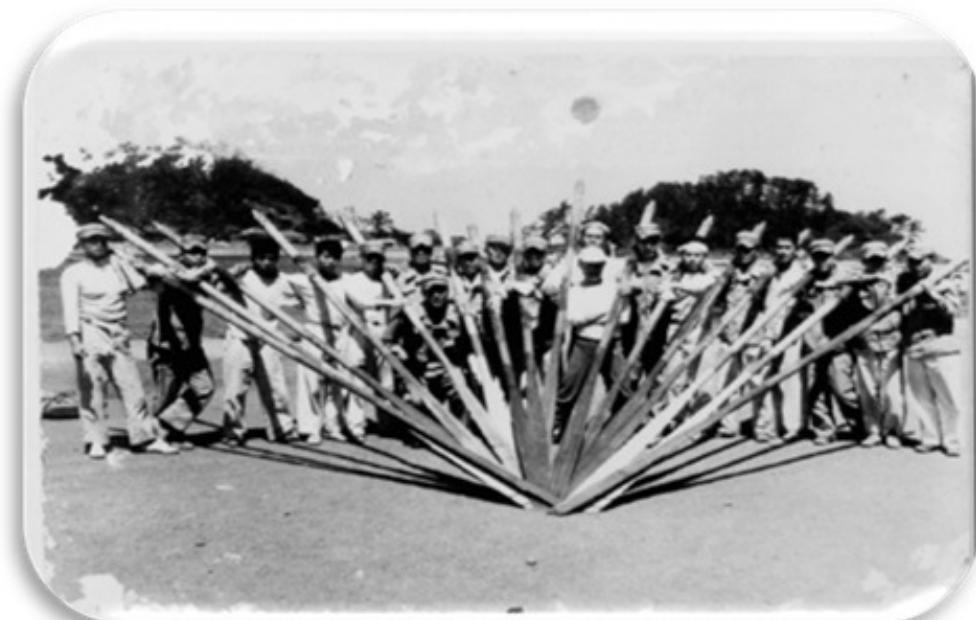
人が1丸となって、捨て身で狂ったために、波に負ける事無く最初から大きな前進慣性が付いて、船首が上下せず、波を切る度に今までに聞いたことのない、小刻みで短い快適なバサバサ、バサバサと言う音と、快い振動がした。

重くて定評があり、防大始まって以来勝ったことがない、53中隊のカッターが、快適に魔物に憑かれた如く、自然抵抗を振り払い、ぐいぐいと突っ走った。我々は、完全に勝った。我々のカッターは、相当の波にもかかわらず、大差を開けてポンドに入った。漕いでいたので正確には分からぬが、多分2位から10挺身以上は離していただろう。

残念ながら、不思議にも死にそうな奴は1人もいなかった。13人の嬉しそうな眼差しが私の目を探して、胸の奥まで我勝ちに飛び込んで来て、それぞれの苦惱と疲労が1致して突然の歓喜に変わった。陸上班の我々が海上班を押さえて、勝った!

私はSに「赤鬼さん」または「赤兄さん」と呼ばれるようになった。私は時々、何か辛い事があると、この時のSの嬉しそうな目玉を今でも鮮やかに思い出す。手応えのあった青春の快挙であった。私の海上への憧れに、終止符を打った出来事。しかし、1度、皆に、また会って見たい!

(Sは、ガンになり、私に会いたがったまま、死んだそうだ。胸が痛む。)



I'M in the back row with a head band. Mr. Sumino is in front of me.

発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター（R&I）

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-3 日比谷国際ビル18階 ヴィップシステム(株)内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 TEL 080-9982-6237

●事務局 E-mail : haruo_shimamura@hotmail.com HP : <http://retire-info.org/>

(発行責任者) 事務局 島村 晴雄